

I 雇用動向調査の概要

1 調査の沿革

この調査は、昭和39年から雇用労働力の流動状況を明らかにするため、上半期（1月～6月）、下半期（7月～12月）に分けて年2回実施している。調査の沿革は、まず昭和23年には「雇用状態調査」が実施された。その後昭和27年には「労働異動調査」が、また昭和31年には「失業者帰趨調査」が実施され、ともに昭和38年まで継続して行われた。しかし、これらはいずれも産業、規模等の範囲に制約があり限られたものであった。そこで昭和39年にそれまで実施していた「労働異動調査」、「失業者帰趨調査」を発展的に拡大整備し、「雇用動向調査」として実施することになった。

また、我が国における労働力需要の実態を明らかにするために昭和44年から実施していた「求人等実態調査」を昭和50年から「雇用動向調査附帯調査」として「雇用動向調査」と併せて実施してきたが、平成11年から「雇用動向調査」に統合した。

2 調査の目的

主要産業の事業所における入職者、離職者等についての属性、入職及び離職に関する事情等並びに事業所における未充足求人の状況等について調査し、労働力の移動や未充足求人状況等の実態を明らかにする。

3 調査の内容

(1) 調査の範囲

ア 地域

日本国全域とする（一部島嶼等を除く）。

イ 産業

日本標準産業分類に基づく次に掲げる16大産業とする。

- | | |
|------------------|---|
| (ア) 鉱業，採石業，砂利採取業 | (イ) 建設業 |
| (ウ) 製造業 | (エ) 電気・ガス・熱供給・水道業 |
| (オ) 情報通信業 | (カ) 運輸業，郵便業 |
| (キ) 卸売業，小売業 | (ク) 金融業，保険業 |
| (ケ) 不動産業，物品賃貸業 | (コ) 学術研究，専門・技術サービス業 |
| (サ) 宿泊業，飲食サービス業 | (シ) 生活関連サービス業，娯楽業（その他の生活関連サービス業のうち家事サービス業を除く） |
| (ス) 教育，学習支援業 | (セ) 医療，福祉 |
| (ソ) 複合サービス事業 | (タ) サービス業（他に分類されないもの）（外国公務を除く） |

ウ 事業所

上記「イ」に掲げる産業に属し、5人以上の常用労働者を雇用する民営、公営及び国営の事業所のうちから、無作為抽出により抽出された14,410事業所を調査、有効回答（集計）事業所数は（上期）9,775事業所、（下期）9,691事業所、平均有効回答率（67.5%）であった。

（注） 事業所の抽出方法については「標本設計及び結果の推計並びに標準誤差(22頁)」を参照のこと。

エ 入職者、離職者

平成 24 年中に、上記「ウ」に属する事業所に入職又は同事業所から離職した常用労働者のうちから、それぞれ無作為抽出した。集計入職者は 88,239 人、集計離職者は 95,946 人であった。

(注) 労働者の抽出方法については「標本設計及び結果の推計並びに標準誤差(22 頁)」を参照のこと。

(2) 調査事項

ア 事業所に関する事項

- (ア) 事業所の名称、所在地、主な生産品の名称又は事業の内容及び企業全体の常用労働者数
- (イ) 性、雇用形態、就業形態別常用労働者及び出向者の異動状況
- (ウ) 性、年齢及び就業形態別常用労働者数（上半期調査のみ）
- (エ) 常用労働者のうち出向者数及びパートタイム労働者数
- (オ) 職業、就業形態別常用労働者数及び未充足求人数（上半期調査のみ）

イ 入職者に関する事項

- (ア) 属性に関する事項
性、年齢、学歴及び卒業した年
- (イ) 入職に関する事項
求職活動でのインターネットの利用の有無、入職経路、就業形態、職業、前職の有無、入職入職前の勤め先の所在地又は入職前の居住地及び在籍の有無
- (ウ) 前職に関する事項
産業、職業、従業上の地位、離職期間、企業規模、前の勤め先を辞めた理由及び転職による賃金変動状況

ウ 離職者に関する事項

- (ア) 属性に関する事項
性、年齢、学歴及び卒業した年
- (イ) 離職直前の雇用状況に関する事項
就業形態、職業、勤続期間及び離職理由

(3) 調査の対象期間

上半期調査 平成 24 年 1 月から同年 6 月までに行った。

下半期調査 平成 24 年 7 月から同年 12 月までに行った。

ただし、上半期調査のうち事業所票「6 性、年齢階級別常用労働者数」及び「7 職業別常用労働者数及び未充足求人数」は平成 24 年 6 月末日について行った。

(4) 調査の実施期間

上半期調査 平成 24 年 7 月 1 日から同年 7 月 31 日までとした。

下半期調査 平成 25 年 1 月 16 日から同年 2 月 15 日までとした。

(5) 調査機関

ア 調査の系統

厚生労働省 —— 都道府県労働局 —— 公共職業安定所 —— 調査員 —— 報告者

イ 調査従事者

都道府県労働局及び公共職業安定所の職員並びに調査員によって行った。

調査票	報告書統計表番号		原表番号	集計客體							事業所			属性等					入職時の状況		前職の状況					離職状況									
	年	半		期	常用労働者	出向者	切替・転入・転出	入職者	在籍者	前職雇用者	離職者	地域	産業	企業規模	年齢	最終学歴	職歴	雇用形態	就業形態	職業	インターネット	入職経路	賃金変動	地域	産業	企業規模	職業	従業上の地位	離職期間	転職理由	勤続期間	離職理由			
																																	入職率	有	者
入職者票	7		17				○				GT		2	△ ^L ₁₁	文	△ ^L ₄			大																
	17		18-1				○				GT		2	△ ^L ₁₁		△ ^L ₄		△ ^L ₂	大		10														
			18-2				□				47											10													
	18	8	19-1						○		GT	△ ^L ₃	2	△ ^L ₁₁				△ ^L ₂	大					△ ^L ₃	大		△ ^L ₃								
			19-2						○		GT		2	△ ^L ₁₁																					
			20						○		GT		2	△ ^L ₁₁																					
			21						○		大	GT・E	2	△ ^L ₁₁					2												7	12.8			
	16	11	22						○		大	GT・E	2	△ ^L ₁₁					2																
	14		23-1					○			大	GT・E	2	△ ^L ₁₁																		7			
			23-2					○			47																								
	11		24-1					○	□		47	大	GT・E	2			△ ^L ₄																		
			24-2					○	△		13	大	GT・E	2																					
	20		25					在		○	13	3		△ ^L ₂																					
	23	10	26					○			47	GT	2	△ ^L ₂		5	4																		
	21		27					○			47	GT	2	△ ^L ₁₁			4																		
19	13	28					○			13	GT	2	△ ^L ₁₁			△ ^L ₄																			
22	12	29					○			47	GT	2	△ ^L ₂			△ ^L ₄																			
		30-1					○			13	GT	2	△ ^L ₂																						
		30-2					○			11		2	△ ^L ₂																						

調査票	報告書統計表番号		原表番号	集計客體							事業所			属性等					入職時の状況		前職の状況					離職状況									
	年	半		期	常用労働者	出向者	切替・転入・転出	入職者	在籍者	前職雇用者	離職者	地域	産業	企業規模	年齢	最終学歴	職歴	雇用形態	就業形態	職業	インターネット	入職経路	賃金変動	地域	産業	企業規模	職業	従業上の地位	離職期間	転職理由	勤続期間	離職理由			
																																	入職率	有	者
入職者票	27	19,21	31						○			5	2	11				2																	
	25	17	32						○		GT・E	△ ^L ₂	2	5	2		△ ^L ₂																		
	29	14	33						○		GT・E	△ ^L ₂	2				△ ^L ₂																	6	
	30	15	34-1						○		GT・E	△ ^L ₂	2	△ ^L ₁₁			△ ^L ₂																	13	
	31	16	34-3						○		GT	5	2	11				△ ^L ₂																	13
	26		35						○		GT	2	2	5	2			△ ^L ₂			大														
	33	20	36						○		GT	2	2	11				△ ^L ₂			大													△ ^L ₁₃	
	32		37						○		GT	2	2	△ ^L ₁₁				△ ^L ₂			大													6	
	28		38-1						○	□	47	大	GT・E	2																					
			38-2						○	△	13	大	GT・E	2																					
	34	18	39						○		47	GT	2	△ ^L ₂		5	2																		
	35		40						○		47	GT	2	△ ^L ₂																					

数字は集計区分数、字句は集計対象を示す。

なお、報告書に収録されていない集計区分については、次のとおりとする。

- △ ... 年集計並びに上半期集計についていずれも未収録である区分
- △^L ... 上半期集計について未収録である区分
- ... 年集計並びに上半期集計についていずれも報告書に未収録であるが、平成24年より年集計のみを政府統計の総合窓口e-statへ掲載している区分

- 〔集計客體〕
- 首 = 期首 (1月1日現在)
 - 末 = 期末 (6月30日現在)
 - 在 = 調査時在籍者のみ
 - 入 = 入職経路が出向及び出向先からの復帰者のみ
 - 退 = 退職者
- 〔事業所〕
- 13 = 13ブロック別 (調査の説明 III 主要用語の説明 (22) 参照)
 - 47 = 47都道府県別 (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
 - 大 = 産業大分類 (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
 - GT・E = 産業計、製造業のみ (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
 - GT = 産業計のみ (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
 - 生産 = 生産工程従事者のみ (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
- 〔属性等〕
- 文理 = 大学の文科系及び理科系別
 - パート = パートタイム労働者のみ
 - 大 = 職業大分類 (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
 - 出 = 出向、出向先からの復帰 (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
 - 前職の状況 (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
 - 大 = 産業大分類又は職業大分類 (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
 - 13 = 13ブロック別 (調査の説明 III 主要用語の説明 (22) 参照)
 - 3 = 第1次、第2次、第3次産業別 (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
 - 生産 = 生産工程従事者のみ (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)
 - GT・E = 産業計、製造業のみ (調査の説明 III 主要用語の説明 (23) 参照)

未充足求人に関する事項

調査票	報告書統計表番号	原表番号	集計客體	事業所		属性等																				
				地域	産業	就業形態	職業	職業	欠員率																	
業所票	38	41-1	未	○	○	5	△	*	大	○	大	○														
													41-2	○	○	△	*	大	○							
																				41-3	○	○	△	*	大	○
42-2	○	13	大	GT.E.I.P	1	*	大																			
42-3	○	13	大	GT.E.I.P	1	*	大	○																		

(注) * パートタイム労働者はうち数であり、報告書には合計のみ掲載している。

〔集計客體〕

- 末 = 期末 (6月30日現在)
- 大 = 産業大分類
- 13 = 13ブロック別 (調査の説明 III 主要用語の説明 (22) 参照)
- GT.E.I.P = 産業計、製造業、卸売業、小売業及びサービス業(他に分類されないもの)のみ (属性等)
- 大 = 職業大分類

Ⅱ 調査結果利用上の注意

- (1) この報告書は、上半期調査と下半期調査の結果を合算し、年間の結果としてとりまとめたものである。
- (2) この調査は、上半期（平成 24 年 1 月 1 日～6 月末日）及び下半期（平成 24 年 7 月 1 日～12 月末日）とも、調査対象事業所を期首（上半期 1 月 1 日、下半期 7 月 1 日）現在で固定し、その後 6 か月間における常用労働者の移動の状況を調査しているため、当該期間中に廃止又は新設された事業所における状況は含まない。
- (3) この報告書に掲載している統計表の平成 24 年 1 月 1 日現在の常用労働者数は、平成 23 年 12 月末日現在の状況について調査した常用労働者数である。
- (4) この調査の調査対象は、昭和 39 年は事業所規模 10 人以上であったが、40 年から事業所規 5 人以上に拡大された。また昭和 44 年までの調査対象産業のサービス業は、日本標準産業分類「大分類 L サービス業」のうち「L82、83 自動車整備等、その他の修理業、L88 医療業」のみであったが、45 年から「L76 家事サービス業、L91 教育、L96 在日外国公務」を除くサービス業に拡大された。なお、48 年より調査対象地域に沖縄県が含まれた。したがって、それぞれ拡大以前と以降との実数値は単純には比較できない。
- (5) この報告書の統計表の入職者・離職者には、同一企業内で異動（転勤）した者は含まない。
- (6) 統計表の数値は、百人未満を四捨五入した結果である。また、前職等の調査には「不詳」があり、合計にはこれらも含まれているので、表示されている数値の合計とは必ずしも一致しない。該当数字はあるが、表章単位に満たないものは「0.0」、当該数値のないものは「-」、表章することが不適当なものは「…」として表示している。なお、前年差（又は前年同期差）及び増減数は、表章単位の数値から算出している。
- (7) 入職者の前職等の状況（前職産業、職業、地域、従業上の地位及び前職雇用者について離職期間、前従業先の規模、転職理由、賃金変動状況）については、各期の調査実施時に在籍していた者についてのみ調査した数値である。
- (8) 昭和 46 年より、規模別表章は従来の規模区分から「官公営」を分離したが、統計表には表章しなかった。したがって規模計には「官公営」が含まれているため、内訳の数値の合計とは必ずしも一致しない。
- (9) 未充足求人に関する事項は「雇用動向調査附帯調査票」として別様式で実施してきたが、平成 11 年より事業所票の中に盛り込んだ。そのためこれまで「雇用動向調査附帯調査」としていた部分は、「未充足求人に関する事項」として掲載している。
- (10) 平成 21 年調査から表章を日本標準産業分類（平成 19 年 11 月改定）に基づいている。このため、不動産業、物品賃貸業、学術研究、専門・技術サービス業、宿泊業、飲食サービス業、生活関連サービス業、娯楽業及びサービス業（他に分類されないもの）については改定前の産業分類とは分類の範囲が大きく異なる。

また、平成 16 年調査から平成 20 年調査までは表章を日本標準産業分類（平成 14 年 3 月改定）に基づいており、平成 16 年調査から調査の範囲に学校教育、社会教育等を加えている。さらに、平成 15 年以前の結果は、平成 5 年 10 月改定の日本標準産業分類に基づいており、平成 21 年以降の調査結果と直接比較することはできないため、注意を要する。
- (11) 平成 23 年調査から日本標準職業分類（平成 21 年 12 月改定）に基づき表章している。このため、改定前の職業分類とは分類範囲が大きく異なり、平成 22 年以前の調査結果と直接比較することはできない。
- (12) 報告書掲載の集計表について、疑問点等については厚生労働省大臣官房統計情報部雇用・賃金福祉統計課へ照会されたい。

Ⅲ 主要な用語の説明

調査結果の概況及び統計表に用いられた主要な調査事項の定義は次のとおりである。

1 事業所票に関する事項

(1) 産 業

事業所の属する産業は、事業所の事業の内容及び主要な生産品又は取扱品の名称により、日本標準産業分類に従ってきめた。

(2) 事業所

物の生産やサービスの提供などの事業活動が行われている一定の場所で、なんらかの建物又は設備などで一区画を占めているものをいう。同一経営者のもとに事業活動をしていても、占める区画が異なればそれぞれを1事業所とした。また、同一経営体にあり、かつ同一区画で2つ以上の異なった事業活動を営んでいる場合には、経営諸帳簿、賃金台帳などの備え付けのある単位をそれぞれ1事業所とした。ただし、鉱業の山元坑口や建設業の工事現場などは、そのみでは調査票作成の対象事業所とせず、これら各坑、現場を総括する上位の監督的事務所を調査事業所の単位とした。

(3) 規 模

ア 企業規模

調査の対象期間の期首（上半期調査においては平成24年1月1日現在、下半期調査においては7月1日現在）に、調査対象事業所と同一企業（会社）に属するすべての事業所に雇用されている常用労働者数により、次の区分によって表示した。

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| (1) 1,000人以上 | (2) 300～999人 | (3) 100～299人 |
| (4) 30～99人 | (5) 5～29人 | |

イ 前職の企業規模

入職者が、当該事業所に入職する前に、雇用労働者として就業していた事業所の属する企業（会社）全体の従業員数（常用労働者数によるものではない）に基づいて、次の区分により表示した。

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| (1) 1,000人以上 | (2) 300～999人 | (3) 100～299人 |
| (4) 30～99人 | (5) 5～29人 | (6) 4人以下 |

(4) 常用労働者

ア 常用労働者

次のうちいずれかに該当する労働者のことである。

- (ア) 期間を定めずに雇われている者
- (イ) 1か月を超える期間を定めて雇われている者
- (ウ) 1か月以内の期間を定めて雇われている者又は日々雇われている者で、前2か月にそれぞれ18日以上雇われている者

なお、(i)重役、理事などの役員でも部長、工場長などのように常時勤務して、役員としての報酬以外に一般の労働者と同じ給与規則で毎月給与が支払われている者及び(ii)事業主の家族で常時その事業所に勤務し、他の労働者と同じ給与規則で毎月給与が支払われている者は常用労働者

働者に含める。

(注)「労働者派遣法」にいう労働者派遣事業を営む人材派遣会社からの派遣労働者は、派遣元の労働者として扱い、派遣先では常用労働者に含めない。

イ 常用名義の常用労働者

常用労働者のうち、期間を定めずに雇われている者のことである。

なお、試用又は見習い期間中の者でも、それらの期間が終了後、常用名義の労働者になる者も含む。

ウ 臨時・日雇名義の常用労働者

常用労働者のうち、上記「常用名義の常用労働者」に該当する者を除いた者のことである。

エ パートタイム労働者

常用労働者のうち、1日の所定労働時間がその事業所の一般労働者よりも短い者又はその事業所の一般労働者と1日の所定労働時間が同じでも1週の所定労働日数が少ない者をいう。

オ 一般労働者

常用労働者のうち、「パートタイム労働者」を除いた労働者を集計区分上、「一般労働者」としている。

カ 出向者

常用労働者のうち、企業間の契約又は企業の命令に基づき、他の企業の指揮命令を受けて勤務するために企業間を移動した者（在籍、移籍を問わない）をいう。

(5) 入 職 者

常用労働者のうち、調査対象期間中に事業所が新たに採用した者をいい、他企業からの出向者・出向復帰者を含み、同一企業内の他事業所からの転入者を除く。

なお、調査対象期間中に常用労働者の定義（前記(4) 参照）に該当するようになった者及び定年で退職し、引き続き嘱託・臨時等として雇用された者を含む。

(6) 同一企業（会社）内からの転入者及び給与支給の復活者等

調査対象期間中に増加した常用労働者のうち、入職者（前記(5) 参照）を除いた者のことで、これには次の事例が該当する。

ア 同一企業（会社）内の他の事業所から転入してきた者。

イ 休職、その他の理由により給与の支給が停止されていた者で、調査対象期間中に復職、その他の理由により給与が支給されるようになった者。

(7) 離 職 者

常用労働者のうち、調査対象期間中に事業所を退職したり、解雇された者のことをいい、他企業への出向者・出向復帰者を含み、同一企業内の他事業所への転出者を除く。

なお、定年で退職し引き続き嘱託・臨時等として雇用された者も、定年退職時一時離職した者として離職者に含む。

ア 退職者

離職者のうち、調査期間中に離職した出向者・出向復帰者を除いた者。

(8) 同一企業（会社）内への転出者及び給与支給の停止者等

調査対象期間中に減少した常用労働者のうち、離職者（前記(7) 参照）を除いた者のことで、これには次の事例が該当する。

- ア 同一企業（会社）内の他の事業所へ転出した者。
- イ 休職その他の理由により給与の支給が停止されるに至った者。

(9) 臨時・日雇名義から常用名義に切り替えられた者

調査対象期間期首の常用労働者及び調査対象期間中の増加労働者のうち、臨時・日雇名義であった者で調査対象期間中に昇格・登用などにより常用名義に切り替えられた者をいう。

(10) 未充足求人

常用労働者のうち、平成 24 年 6 月末日現在、事業所における欠員であり、仕事があるにもかかわらず、その仕事に従事する人がいない状態を補充するためにおこなっている求人をいう。

なお、従事する仕事が 7 月 1 日以降に生ずる予定のものは除いているが、教育訓練などの必要性から仕事に従事する時期が 7 月 1 日以降になる場合は含めている。

2 入職者票、離職者票に関する事項

(11) 年齢階級

入職時、離職時における満年齢により次のとおり区分した。

- | | | |
|--------------|-------------|-------------|
| (1) 19 歳以下 | (2) 20～24 歳 | (3) 25～29 歳 |
| (4) 30～34 歳 | (5) 35～39 歳 | (6) 40～44 歳 |
| (7) 45～49 歳 | (8) 50～54 歳 | (9) 55～59 歳 |
| (10) 60～64 歳 | (11) 65 歳以上 | |

(12) 学歴

入職者・離職者の最終の卒業学校をいう。ここでいう学校とは学校教育法第 1 条に規定する学校及びこれらに準ずる学校を卒業した場合の学歴をいい、学校教育法第 1 条に規定する学校と入学資格や在学年数が同等で、これらの卒業に相当する資格が得られるものはそれぞれ該当する学校に含める。

平成 8 年より調査票を変更し、専修学校（専門課程）と高専・短大を分離した。

(13) 新規学校卒業者

平成 24 年に最終の学校を卒業した者。

(14) 入職前のインターネットの利用

ア 民間等の求人広告会社のサイト

地方自治体で運営しているサイトも含む。

イ しごと情報ネット

認定された参加機関（民間職業紹介事業所、民間求人情報提供事業所、求人情報の提供を行う地方公共団体や経済団体、労働者派遣事業所、公共職業安定所）が保有する求人情報を一覧、検索できる国のサイトである「しごと情報ネット」を利用した場合。

ウ ハローワークインターネットサービス

公共職業安定所の求人情報を一覧、検索できる国のサイトである「ハローワークインターネットサービス」を利用した場合。

エ その他のサイト

学校の求人情報データベース、船員求人情報ネット、検索サービス等のサイトを利用した場合。

オ 面接日の調整や企業に対する質問等に利用

企業セミナー等のイベント情報を収集、企業に資料請求、エントリーシートの利用、企業との連絡、訪問予定企業までの経路調べ、入職希望職種に関連する職業能力開発情報の収集、求職者として登録等に利用した場合。

(15) 入職経路

入職者が調査事業所に入職する際にどのような経路によったかを次により分類した。

ア 安定所（ハローワーク）

公共職業安定所（パートバンク、人材銀行等を含む）で求人情報を見て応募したり、紹介を受けて入職した場合（ハローワークインターネットサービスで見た求人について安定所の紹介を受けて入職した場合を含む）。

イ ハローワークインターネットサービス又はしごと情報ネットを見て応募

ハローワークインターネットサービス又はしごと情報ネットを見て直接応募し、入職した場合。

ウ 民営職業紹介所

有料・無料を問わず、民営職業紹介事業を営む事業所の職業紹介を受けて入職した場合。

エ 学校

学校から紹介された場合（学校教育法第1条に規定する学校のほか、専修学校、各種学校も含む）。

オ 前の会社

現在の事業所に入職以前に就業していた会社の斡旋、援助等による場合（定年後の再雇用等を含む）。

カ 出向

企業間の契約又は企業の命令に基づき、他の企業の指揮命令を受けて勤務するために企業間を移動した場合。

キ 出向からの復帰

出向先の企業から出向元への企業へ移動した場合。

ク 縁 故

知人、友人、親戚、郷里の人などの個人的関係による斡旋、援助等による場合。

ケ 広告

新聞、雑誌（求人情報誌を含む）、チラシ、はり紙、折込広告、テレビ、ラジオなどの募集広告及びインターネット・パソコン通信上の求人情報をみて応募した場合。

コ その他

上記アからケまでの経路以外によって入職した場合（商工会議所、地方公共団体の広報又は地方公共団体の職業紹介なども含む）。

なお、統計表においては「縁故」に「前の会社」を含めて表章している。

(16) 就業形態

この調査では、パートタイム労働者であるか又はそれ以外の一般労働者であるかによって区分している。

(17) 職 歴

入職者において、入職前1年間における就業経験の有無によって、未就業入職者と既就業者

(転職入職者)に分けている。

ア 未就業入職者

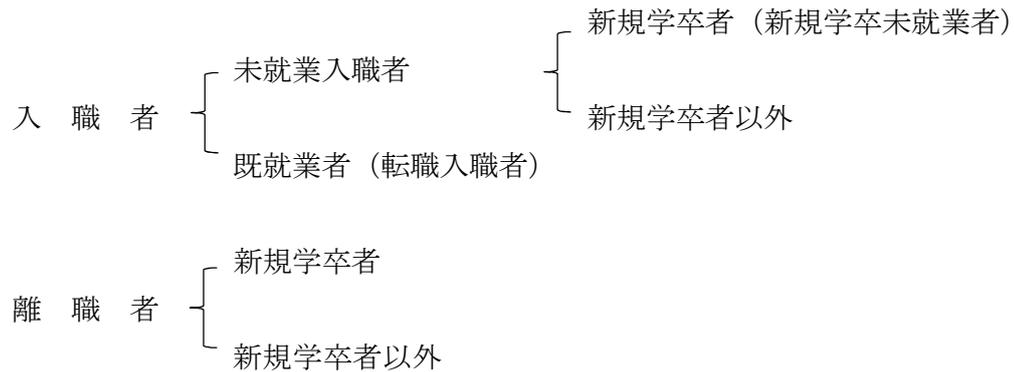
当該事業所に入職する前1年以内に就業経験がなかった者をいい、新規学卒未就業者と新規学卒者以外に分けられる。

イ 既就業者 (転職入職者)

当該事業所に入職する前1年以内に就業経験のあった者をいう。ただし、「内職」や1か月未満の就業は含まない。

ウ 職歴の区分

この調査では、入職者・離職者について次のとおり区分する。



(18) 前職の従業上の地位

ア 雇用者

会社、官公庁、団体、組合、その他の法人あるいは自営業主や個人の家庭に雇われて給料・賃金などを支払われていた者及び団体の役員をいう。

イ 自営業主

個人で事業を営んでいた者をいう。

ウ 家族従業者

自営業主の家族で、給料・賃金をもらわずにその自営業主の営む事業に従事していた者をいう。

(19) 賃金変動

前の事業所をやめる直前と調査事業所に入職した時の賃金が、何割くらい増加したか、あるいは減少したかによって、次の区分により表示した。平成10年より「1割未満の増減」の区分を「1割未満増加」、「変わらない」、「1割未満減少」の3つに分けた。

なお、ここでいう賃金には賞与など臨時的に支払われたものは含まない。

ア 3割以上増加

イ 1割以上3割未満増加

ウ 1割未満増加

エ 変わらない

オ 1割未満減少

カ 1割以上3割未満減少

キ 3割以上減少

(20) 勤続期間

離職する直前に勤めていた事業所での勤務期間で、その企業に勤めていた全期間を含み、また、会社の名義変更、分離、合併などがあつた場合でも継続して勤務した場合は通算する。定年で一旦退職し、当該事業所に引き続き雇用されていた者が離職した場合は、定年までの期間は含めない。

なお、勤続期間の区分は次のとおりである。

- ア 6か月未満
- イ 6か月～1年未満
- ウ 1年～2年未満
- エ 2年～5年未満
- オ 5年～10年未満
- カ 10年以上

(21) 離職理由

- ア 契約期間の満了
期間の定めのある雇用契約で雇用されていた者が、その期間の終了によって離職した場合。
- イ 経営上の都合
事業の縮小、合理化等事業経営上の理由で解雇された場合。また、企業からの要請により希望退職に応じた場合も含める。
- ウ 出向
企業間の契約又は企業の命令に基づき、他の企業の指揮命令を受けて勤務するために企業間を移動した場合。
- エ 出向元への復帰
他企業へ出向していた者が出向先から出向元企業へ復帰した場合。
- オ 定年
就業規則等に基づいて、一定の年齢に到達したことを理由として退職した場合。
- カ 本人の責による
重大な服務規則違反など本人の行為により解雇された場合。
- キ 結婚
結婚の理由で離職した場合。
- ク 出産・育児
出産・育児のために離職した場合。
- ケ 介護
介護のために離職した場合。
- コ 死亡・傷病
死亡、傷病等による場合。
- サ その他の個人的理由
上記を除いた個人的な都合や家庭の事情等で離職した場合。

なお、統計表においては、「経営上の都合」、「出向」、「出向元への復帰」を併せて「事業所側の理由」とし、又「結婚」、「出産・育児」、「介護」、「その他の個人的理由」を併せ「個人的な理由」として表章している。

(22) 地 域

47 都道府県を次の 13 ブロックに区分した。

地域名	都 道 府 県 名
北海道	北海道
東 北	青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島
北関東	茨城、栃木、群馬、山梨、長野
南関東	埼玉、千葉、東京、神奈川
北 陸	新潟、富山、石川、福井
東 海	岐阜、静岡、愛知、三重
近 畿	滋賀、奈良、和歌山
京阪神	京都、大阪、兵庫
山 陰	鳥取、島根
山 陽	岡山、広島、山口
四 国	徳島、香川、愛媛、高知
北九州	福岡、佐賀、長崎、大分
南九州	熊本、宮崎、鹿児島、沖縄

注 入職・離職前の地域が上記以外の場合は「外国等」としている。

(23) 産業分類

日本標準産業分類（平成19年11月改定）に基づいて次のとおり分類している。

日本標準産業分類番号及び名称		現 職 産 業			前 職 産 業	
		中分類	大分類	大分類団	大分類	大分類団
(調査産業計)						
A・B	農業，林業・漁業				○	第1次
C	鉱業，採石業，砂利採取業	○	○	} 第2次	○	} 第2次
D	建設業	○	○		○	
E	製造業	○	○		○	
09, 10	食料品，飲料・たばこ・飼料製造業	○	} (消)	} (消)	}	
11	繊維工業	○				
12	木材・木製品製造業	○	(素)	(素)	}	
13	家具・装備品製造業	○	(消)	(消)		
14	パルプ・紙・紙加工品製造業	○	(素)	(素)		
15	印刷・同関連業	○	(消)	(消)		
16, 17	化学工業，石油製品・石炭製品製造業	○	} (素)	} (素)		
18	プラスチック製品製造業	○				
19	ゴム製品製造業	○				
21	窯業・土石製品製造業	○				
22	鉄鋼業	○	} (機)	} (機)		
23	非鉄金属製造業	○				
24	金属製品製造業	○				
25	はん用機械器具製造業	○				
26	生産用機械器具製造業	○	} (機)	} (機)		
27	業務用機械器具製造業	○				
28	電子部品・デバイス・電子回路製造業	○				
29	電気機械器具製造業	○				
30	情報通信機械器具製造業	○				
31	輸送用機械器具製造業	○	} (消)	} (消)		
32, 20	その他の製造業，なめし革・同製品・毛皮製造業	○			(消)	(消)
F	電気・ガス・熱供給・水道業	○	○	} 第3次	} 第3次	
G	情報通信業	○	○			
H	運輸業，郵便業	○	○			
I	卸売業，小売業	○	○			
50~55	卸売業	○	○			
56~61	小売業	○	○			
J	金融業，保険業	○	○			
K	不動産業，物品賃貸業	○	○			
L	学術研究，専門・技術サービス業	○	○			
M	宿泊業，飲食サービス業	○	○			
N	生活関連サービス業，娯楽業	○	○			
80	娯楽業	○	○			
O	教育，学習支援業	○	○			
P	医療，福祉	○	○			
83	医療業	○	○			
85	社会保険・社会福祉・介護事業	○	○			
Q	複合サービス事業	○	○			
R	サービス業	○	○			
(他に分類されないもの)						
89, 90	自動車整備業，機械等修理業	○				
92	その他の事業サービス業	○				
S	公務				○	
T	分類不能・不詳				1)	1)
備 考		(消)は消費関連産業、(素)は素材関連産業、(機)は機械関連産業としてそれぞれ統合した。				

注 1) 不詳は表章しないが前職産業計には含む。

(24) 職業分類

日本標準職業分類（平成 21 年 12 月改定）に基づいて次のとおり分類している。

ア 管理的職業従事者

課（課相当を含む）以上の内部組織の経営・管理に従事する者をいう。例えば、部長、課長、工場長、支店長、駅長など。

イ 専門的・技術的職業従事者

高度の専門的水準において、科学的知識を応用した技術的な仕事に従事する者及び医療・法律・芸術・その他の専門的性質の仕事に従事する者をいう。例えば、化学研究員、情報工学研究員、農産物検査員、システム設計技術者、医師、薬剤師、助産師、看護師、准看護師、理学療法士、歯科衛生士、保育士、弁護士、司法書士、写真家、デザイナー、プロデューサー、教員、記者、編集者など。

ウ 事務従事者

一般に課長（課長相当職を含む）以上の職務にある者の監督を受けて、庶務・人事・会計・調査等の仕事、運輸・通信・生産関連・営業販売・外勤に関する事務及び事務用機械の操作の仕事に従事する者をいう。例えば、一般事務員、窓口事務員、受付・案内事務員、経理事務員、生産管理事務員、営業事務員、駅務員、集金人、検針員、郵便事務員、キーパンチャー、パーソナルコンピュータ操作員など。

エ 販売従事者

商品の仕入れ・販売、不動産、証券などの売買、売買の仲立・取次・代理などの仕事、保険外交、商品の売買・製造などに関する取引上の勧誘・交渉・受注・契約締結の仕事に従事する者をいう。例えば、小売店員、レジスター係、商品訪問・移動販売従事者、再生資源回収・卸売従事者、不動産仲介人、有価証券売買・仲立人、保険外交員、広告取りなど。

オ サービス職業従事者

介護・身の回りの用務・調理・接客・娯楽など個人に対するサービス、居住施設・ビルなどの管理サービス及びその他のサービスの仕事に従事する者をいう。例えば、介護職員、ホームヘルパー、看護助手、歯科助手、理容師、美容師、クリーニング職、調理師、給仕人、ウェイトレス・ウェイター、キャディ、インフォメーション係、ビル管理人、旅行添乗員、物品一時預かり人など。

カ 保安職業従事者

人の身边において、身体に対する危害の発生の警戒・防止、又は工場・病院・学校・事務所・住宅・その他の施設などにおいて、火災・破損・盗難の予防、突発事故・不法侵入の防止など、人の生命、財産の保護又は構内秩序の維持等に関する警備の仕事に従事する者をいう。例えば、ガードマン、守衛、門衛、警備員、鉄道警備員、倉庫見回員、建設現場誘導員、プール・海水浴場監視員など。

キ 生産工程従事者

生産設備の制御・監視の仕事、機械・器具・手道具等を用いて原料・材料を加工する仕事、各種の機械器具を組立・調整・修理する仕事、製版・印刷・製本の作業、その他の生産工程の仕事に従事する者をいう。例えば、製鉄設備操作・監視作業員、製鋼設備オペレーター、鋳物工、旋盤工、板金従事者、溶接工、食料品製造従事者、紡績工、機械組立工、自動車整備工、印刷・製本従事者、製品検査従事者など。

ク 輸送・機械運転従事者

機関車・電車・自動車・船舶・航空機の運転・操縦の仕事、及びその他の関連する仕事、並びに定置機関・機械及び建設機械を操作する仕事に従事する者をいう。例えば、電車運転士、バス運転者、トラック運転者、タクシー運転者、清掃車運転者、船舶航海士、航空機関士、車掌、甲板長、水力発電員、変電員、クレーン運転士、掘削機械運転工、ボーリング工など。

ケ 建設・採掘従事者

建設の仕事、電気工事に係る作業を行う仕事、ダム・トンネルの掘削などの仕事、鉱物の探査・採掘・採取・選鉱の仕事に従事する者をいう。（ただし、建設機械を操作する人は「輸送・機械運転従事者」となる。）例えば、型枠大工、鉄筋工、大工、屋根ふき工、左官、畳工、配管工、コンクリートはつり工、造園土木工、送電線電工、通信線配線工、掘削工、土木作業員、線路工事作業員、掘削工、採鉱員、石切工、選鉱員など。

コ 運搬・清掃・包装等従事者

主に身体を使って行う定形的な作業のうち、運搬・配送・梱包・清掃・包装等に従事する者をいう。例えば、郵便配達員、船内荷役作業員、貨物自動車荷扱員、再生資源回収人（回収のみ）、新聞配達員、宅配配達員、荷造工、袋詰工、箱詰工、ビル・建物清掃員、ガラス拭き作業員、公園草取作業員、用務員（学校）など。

サ その他の職業従事者

農林漁業作業員又は分類不能の職業の者をいう。例えば、植木職、造園師など。

(25) 各種比率（以下のア～エについて、年齢階級別は、6月末日現在の常用労働者数が分母となる。）

ア 延べ労働移動率

在籍者に対する延べ労働移動者（入職者＋離職者）の割合をいい、次式により算出している。

$$\text{延べ労働移動率} = \frac{\text{延べ労働移動者数}}{\text{1月1日現在の常用労働者数}} \times 100 (\%)$$

イ 入（離）職率

在籍者に対する入（離）職者の割合をいい、次式により算出している。

$$\text{入（離）職率} = \frac{\text{入（離）職者数}}{\text{1月1日現在の常用労働者数}} \times 100 (\%)$$

ウ 転職入職率

在籍者に対する転職入職者の割合をいい、次式により算出している。

$$\text{転職入職率} = \frac{\text{転職入職者数}}{\text{1月1日現在の常用労働者数}} \times 100 (\%)$$

エ 未就業入職率

在籍者に対する未就業入職者の割合をいい、次式により算出している。

$$\text{未就業入職率} = \frac{\text{未就業入職者数}}{\text{1月1日現在の常用労働者数}} \times 100 (\%)$$

オ 入職超過率

入職率から離職率を引いたものをいう。プラスであれば入職が離職を上回っている（入職超過）、マイナスであれば離職が入職を上回っている（離職超過）ことを示す。

カ 流入（出）率、流出入比率

地域における流入（出）者の割合をいい、次式により算出している。

$$\text{流入率} = \frac{\text{他地域から当該地域への入職者数}}{\text{当該地域への入職者数}} \times 100 (\%)$$

$$\text{流出率} = \frac{\text{当該地域から他地域への入職者数}}{\text{当該地域から当該地域への入職者数} + \text{当該地域から他地域への入職者数}} \times 100 (\%)$$

$$\text{流出入比率} = \frac{\text{当該地域から他地域への入職者数}}{\text{他地域から当該地域への入職者数}} \quad (\text{倍})$$

キ 欠員率

在籍者に対する未充足求人の割合をいい、次式により算出している。

$$\text{欠員率} = \frac{\text{未充足求人数}}{\text{6月末日現在の常用労働者数}} \times 100 (\%)$$

IV 標本設計及び結果の推計並びに標準誤差

1 概要

本調査の対象となった母集団は 16 大産業の常用労働者 5 人以上の事業所（約 189 万事業所）、同事業所に雇用されている常用労働者並びに平成 24 年中における同事業所への入職者及び同事業所からの離職者である。

調査対象の選定は、まず全事業所を産業、事業所規模により層化し、層毎に定められた抽出率で調査対象事業所を抽出し、さらにその抽出された事業所における入職者及び離職者から所定の抽出率で調査入職者及び離職者を抽出する方法によった。

2 調査事業所の抽出枠

事業所規模 30 人以上の事業所については、平成 21 年経済センサス-基礎調査によって把握した民営事業所及び国公営事業所、事業所規模 5～29 人の事業所については、毎月勤労統計調査調査区内の民営事業所及び国公営事業所を調査事業所抽出のための枠とした。

3 抽出率の決定

(1) 調査事業所の抽出

ア 事業所規模 500 人以上

全数抽出

イ 事業所規模 100～499 人、30～99 人、5～29 人

入職率及び離職率の標準誤差が産業大分類別（製造業、卸売業、小売業においては中分類を統合した分類別）に規模 100～499 人は 0.8%、規模 30～99 人は 0.9%、規模 5～29 人は 1.0%となるように抽出率を設定。

(2) 入職者及び離職者の抽出

事業所規模計において、入職者のうち 20～24 歳の構成比及び離職者のうち 60～64 歳の構成比の標準誤差が産業大分類別（製造業、卸売業、小売業においては中分類を統合した分類別）に 4.0%となるように抽出率を設定。ただし、事業所規模 30～99 人、5～29 人の 2 区分については、原則全数抽出。

4 結果の推計及び標準誤差

(1) 事業所票における推計方法

調査結果から、調査対象の常用労働者 5 人以上の事業所における全国の在籍常用労働者（上半期分 1 月、下半期分 7 月）及び調査対象期間（上半期 1～6 月、下半期 7～12 月）中における入・離職者数の推計値を産業、規模別に以下のように算出した。

M : 母集団事業所数

m : 標本事業所数

x_i : 第 i 番目の標本事業所における常用労働者数

y_i : 第 i 番目の標本事業所における入・離職者数

r : 在籍常用労働者数（上半期分 6 月、下半期分 12 月）の推計値 $\frac{M}{m} \sum_{i=1}^m x_i$,

(’は時点の違いを表す。)に対する「毎月勤労統計調査による本月末常用労働者数(上半期分6月、下半期分12月)」の比率

$$\text{常用労働者数の推計値} : x = r \cdot \frac{M}{m} \sum_{i=1}^m x_i$$

$$\text{入・離職者数の推計値} : y = r \cdot \frac{M}{m} \sum_{i=1}^m y_i$$

また、入・離職率 R の推計値 \hat{R} は以下の式による。

$$\hat{R} = \frac{y}{x} = \frac{\sum_{i=1}^m y_i}{\sum_{i=1}^m x_i}$$

なお、調査産業計、事業所規模計など積み上げ区分の場合、入・離職率の推計値は分母・分子毎に各層の推計値を積み上げた上で比を取ったものによる。

(2) 入職者票及び離職者票における推計方法

調査結果から、調査対象期間(上半期1～6月、下半期7～12月)中における属性、職歴、入・離職時の状況別入・離職者数の推計値を以下のように算出した。

N_i : 第 i 番目の標本事業所における総入・離職者数

n_i : 第 i 番目の標本事業所における入・離職者の抽出数

X_{ij} : 第 i 番目の標本事業所における第 j 番目の入・離職者がある属性を持っているかどうかを表す値(例: 20～24歳であれば1、なければ0)

Y_{ij} : 第 i 番目の標本事業所における第 j 番目の抽出入・離職者の人数(=1)

$$\text{ある属性を持った入・離職者数の推計値} : X = r \cdot \frac{M}{m} \cdot \frac{\sum_{i=1}^m N_i}{\sum_{i=1}^m n_i} \cdot \sum_{i=1}^m \left(\sum_{j=1}^{n_i} X_{ij} \right)$$

$$\text{入・離職者数の推計値} : Y = r \cdot \frac{M}{m} \cdot \frac{\sum_{i=1}^m N_i}{\sum_{i=1}^m n_i} \cdot \sum_{i=1}^m \left(\sum_{j=1}^{n_i} Y_{ij} \right)$$

また、入職者(離職者)のうち当該属性を持つ者の割合 R' の推計値は、産業、事業所規模別に以下の式による。

$$\hat{R}' = \frac{X}{Y} = \frac{\sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^{n_i} X_{ij}}{\sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^{n_i} Y_{ij}} = \frac{\sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^{n_i} X_{ij}}{\sum_{i=1}^m n_i}$$

なお、調査産業計、事業所規模計など積み上げ区分の場合、入・離職率の推計値は分母・分子毎に各層の推計値を積み上げた上で比を取ったものによる。

(3) 標準誤差

この調査は標本調査であるため、推計値の持つ誤差の一つとして標本抽出に起因する標本誤差がある。標本誤差の大きさは、「推計値の分散の平方根（標準誤差）」又は「推計値の大きさに対する標準誤差の割合（標準誤差率）」で与えられる。

① 事業所票

(1)で掲げた（層別の）入・離職率の推計値 \hat{R} の場合、標準誤差は以下の式による。

$$\hat{C} = \sqrt{\hat{V}(\hat{R})} = \sqrt{\hat{R}^2 \cdot \frac{M-m}{M} \cdot \frac{\phi^2}{m}}$$

ここで、

$$\phi^2 = C_x^2 + C_y^2 - 2 \cdot \rho_{xy} \cdot C_x \cdot C_y$$

$$C_x^2 = \frac{1}{m-1} \sum_{i=1}^m (x_i - \bar{x})^2 / \bar{x}^2$$

$$C_y^2 = \frac{1}{m-1} \sum_{i=1}^m (y_i - \bar{y})^2 / \bar{y}^2$$

$$\rho_{xy} = \frac{\sum_{i=1}^m (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sqrt{\sum_{i=1}^m (x_i - \bar{x})^2} \sqrt{\sum_{i=1}^m (y_i - \bar{y})^2}}$$

$$\bar{x} = \frac{1}{m} \sum_{i=1}^m x_i \quad \bar{y} = \frac{1}{m} \sum_{i=1}^m y_i$$

なお、調査産業計、事業所規模計など積み上げ区分の場合、標準誤差は以下の式による。（添字 h は層を表す。以下同じ。）

$$\hat{C} = \sqrt{\hat{V}(\hat{R})} = \left[\hat{R}^2 \cdot \sum_{h=1}^L r_h^2 \cdot \left(\frac{M_h}{M} \right)^2 \cdot \frac{M_h - m_h}{M_h} \cdot \frac{1}{m_h(m_h - 1)} \right. \\ \left. \times \left\{ \frac{\sum_{i=1}^{m_h} (x_{hi} - \bar{x}_h)^2}{\bar{x}^2} + \frac{\sum_{i=1}^{m_h} (y_{hi} - \bar{y}_h)^2}{\bar{y}^2} - 2 \cdot \frac{\sum_{i=1}^{m_h} (x_{hi} - \bar{x}_h)(y_{hi} - \bar{y}_h)}{\bar{x} \cdot \bar{y}} \right\} \right]^{\frac{1}{2}}$$

ここで、

$$\bar{x} = \frac{1}{M} \sum_{h=1}^L r_h \cdot M_h \cdot \bar{x}_h \quad , \quad \bar{y} = \frac{1}{M} \sum_{h=1}^L r_h \cdot M_h \cdot \bar{y}_h \quad , \quad M = \sum_{h=1}^L M_h$$

② 入職者票及び離職者票

(2)で掲げた推計値 \hat{R}' の場合、標準誤差は以下の式による。

$$\hat{C} = \sqrt{\hat{V}(\hat{R}')} = \left[\hat{R}'^2 \cdot \left\{ \frac{M(M-m)}{m} \left(\frac{s_{ex}^2}{T_x'^2} + \frac{s_{ey}^2}{T_y'^2} - 2 \frac{\text{cov}_e(x,y)}{T_x' T_y'} \right) \right. \right. \\ \left. \left. + \frac{M}{m} \sum_{i=1}^m \frac{N_i(N_i - n_i)}{n_i} \left(\frac{s_{ix}^2}{T_x'^2} + \frac{s_{iy}^2}{T_y'^2} - 2 \frac{\text{cov}_i(x,y)}{T_x' T_y'} \right) \right\} \right]^{\frac{1}{2}}$$

ここで、

$$\begin{aligned}\bar{T}'_x &= \frac{1}{m} \sum_{i=1}^m T'_{ix} & T'_x &= \frac{M}{m} \sum_{i=1}^m T'_{ix} & T'_{ix} &= \frac{N_i}{n_i} \sum_{j=1}^{n_i} X_{ij} \\ \bar{T}'_y &= \frac{1}{m} \sum_{i=1}^m T'_{iy} & T'_y &= \frac{M}{m} \sum_{i=1}^m T'_{iy} & T'_{iy} &= \frac{N_i}{n_i} \sum_{j=1}^{n_i} Y_{ij} = N_i \\ s_{ex}^2 &= \frac{1}{m-1} \sum_{i=1}^m (T'_{ix} - \bar{T}'_x)^2 & s_{ix}^2 &= \frac{1}{n_i-1} \sum_{j=1}^{n_i} (X_{ij} - \bar{X}_i)^2 \\ s_{ey}^2 &= \frac{1}{m-1} \sum_{i=1}^m (T'_{iy} - \bar{T}'_y)^2 & s_{iy}^2 &= \frac{1}{n_i-1} \sum_{j=1}^{n_i} (Y_{ij} - \bar{Y}_i)^2 = \frac{1}{n_i-1} \sum_{j=1}^{n_i} (1-1)^2 = 0 \\ \text{cov}_e(x, y) &= \frac{1}{m-1} \sum_{i=1}^m (T'_{ix} - \bar{T}'_x)(T'_{iy} - \bar{T}'_y) \\ \text{cov}_i(x, y) &= \frac{1}{n_i-1} \sum_{j=1}^{n_i} (X_{ij} - \bar{X}_i)(Y_{ij} - \bar{Y}_i) = \frac{1}{n_i-1} \sum_{j=1}^{n_i} (X_{ij} - \bar{X}_i)(1-1) = 0\end{aligned}$$

なお、調査産業計、事業所規模計など積み上げ区分の場合、標準誤差は以下の式による。

$$\begin{aligned}\hat{C} = \sqrt{\hat{V}(\hat{R}')} &= \left[\hat{R}'^2 \cdot \sum_{h=1}^L r_h^2 \cdot \left\{ \frac{M_h(M_h - m_h)}{m_h} \left(\frac{s_{hex}^2}{T_x'^2} + \frac{s_{hey}^2}{T_y'^2} - 2 \frac{\text{cov}_{he}(x, y)}{T_x' T_y'} \right) \right. \right. \\ &\quad \left. \left. + \frac{M_h}{m_h} \sum_{i=1}^{m_h} \frac{N_{hi}(N_{hi} - n_{hi})}{n_{hi}} \left(\frac{s_{hix}^2}{T_x'^2} + \frac{s_{hiy}^2}{T_y'^2} - 2 \frac{\text{cov}_{hi}(x, y)}{T_x' T_y'} \right) \right\} \right]^{\frac{1}{2}}\end{aligned}$$

ここで、

$$T'_x = \sum_{h=1}^L r_h \cdot \frac{M_h}{m_h} \sum_{i=1}^{m_h} T'_{hix}, \quad T'_{hix} = \frac{N_{hi}}{n_{hi}} \sum_{j=1}^{n_{hi}} X_{hij}, \quad T'_y = \sum_{h=1}^L r_h \cdot \frac{M_h}{m_h} \sum_{i=1}^{m_h} T'_{hiy}, \quad T'_{hiy} = \frac{N_{hi}}{n_{hi}} \sum_{j=1}^{n_{hi}} Y_{hij}$$

事業所票及び入職者票の標準誤差は、次の表のとおりである。推計値を中心としてその前後に標準誤差の2倍ずつの幅をとれば、その区間に全数調査から得られるはずの値（真値）が約95%以上の確率で存在すると考えてよい。

産業別事業所票及び入職者票の標準誤差（平成24年年計）

（単位：％）

産 業	事業所票（入職率）		入職者票（入職者のうち20～24歳の構成比）	
	推計値	標準誤差	推計値	標準誤差
GT 調査産業計	14.8	0.4	21.2	0.7
C 鉱業，採石業，砂利採取業	6.8	1.3	7.1	4.7
D 建設業	10.2	0.8	19.9	2.2
E 製造業	10.6	1.3	17.1	1.4
09, 10 食料品，飲料・たばこ・飼料製造業	17.5	1.9	17.1	2.7
11 繊維工業	8.8	1.7	12.9	5.7
12 木材・木製品製造業	7.1	2.0	9.0	2.1
13 家具・装備品製造業	8.8	2.1	11.3	5.8
14 パルプ・紙・紙加工品製造業	6.5	1.1	11.9	5.7
15 印刷・同関連業	11.8	4.0	23.0	8.0
16, 17 化学工業，石油製品・石炭製品製造業	4.1	1.5	18.1	3.5
18 プラスチック製品製造業	12.8	1.9	18.2	3.9
19 ゴム製品製造業	6.1	1.3	5.9	1.8
21 窯業・土石製品製造業	9.5	3.0	7.6	2.9
22 鉄鋼業	6.6	1.3	36.7	8.6
23 非鉄金属製造業	5.7	7.0	16.3	15.5
24 金属製品製造業	11.7	1.6	23.5	4.8
25 はん用機械器具製造業	12.9	2.6	10.2	2.3
26 生産用機械器具製造業	7.3	0.7	21.7	2.3
27 業務用機械器具製造業	24.4	20.6	12.3	1.0
28 電子部品・デバイス・電子回路製造業	6.8	1.1	15.5	3.2
29 電気機械器具製造業	6.8	1.1	17.1	4.9
30 情報通信機械器具製造業	5.7	1.9	15.3	6.6
31 輸送用機械器具製造業	8.6	4.7	21.9	3.6
32, 20 その他の製造業，なめし革・同製品・毛皮製造業	21.6	4.3	10.0	3.0
F 電気・ガス・熱供給・水道業	8.4	0.7	13.9	2.4
G 情報通信業	9.5	0.6	32.8	2.7
H 運輸業，郵便業	12.0	0.7	12.1	1.3
I 卸売業，小売業	13.2	0.7	27.2	2.0
50～55 卸売業	9.8	0.9	28.0	3.5
56～61 小売業	15.0	0.9	26.9	2.4
J 金融業，保険業	9.5	0.4	31.1	2.6
K 不動産業，物品賃貸業	12.9	0.8	19.9	2.4
L 学術研究，専門・技術サービス業	11.2	0.7	17.2	1.3
M 宿泊業，飲食サービス業	28.7	1.7	22.0	1.9
N 生活関連サービス業，娯楽業	21.2	1.1	32.1	1.7
80 娯楽業	26.2	1.5	31.1	2.1
O 教育，学習支援業	15.5	0.9	22.9	1.8
P 医療，福祉	16.9	0.9	20.5	2.4
83 医療業	17.1	1.3	24.6	2.6
85 社会保険・社会福祉・介護事業	16.7	1.3	15.2	3.7
Q 複合サービス事業	6.1	0.4	31.1	2.8
R サービス業（他に分類されないもの）	20.3	0.8	12.2	0.9
89, 90 自動車整備業，機械等修理業	7.7	0.9	26.0	4.4
92 その他の事業サービス業	20.1	0.8	11.8	1.3